ロレンス＝スターン覚え書

佐久間　信

1

I wish either my father or my mother, or indeed both of them, as they were in duty both equally bound to it, had minded what they were about when they begot me; had they duly considered how much depended upon what they were then doing; that not only the production of a rational Being was concerned in it, but that possibly the happy formation and temperature of his body, perhaps his genius and the very cast of his mind;——and, for aught they knew to the contrary, even the fortunes of his whole house might take their turn from the humours and dispositions which were then uppermost;———Had they duly weighed and considered all this, and proceeded accordingly,—— I am verily persuaded I should have made a quite different figure in the world, from that in which the reader is likely to see me.

トリストラム＝シャンディ氏はその生活と意見をこのように語り始めます。長く続く身の上話の序として読者が予想するような固苦しい所はまったくなく，実に淡々とした，作者が肉声で読者に話しかけるこの調子は，九巻より成るこの本の終りにいたるまで一貫しています。「悪漢小説（ピカレスク・ノベル）」の伝統をひき，主人公が「他の登場人物に対して旅廻りの客引き」の役割をもたされ，馬車に船に乗り，いたるところで様々な階層の人々に出逢い，この交渉を通じて主人公の性格を描き出すと同時に「読者を社会のパノラマ風な展望の旅につれだし社会の興味深い特徴は一つ残らず，しかもわざとらしくなく指し示す」のを主な役割とするフィールデング及びスモーレットの小説を読み馴れていた十八世紀の読者の目，というより寧ろ耳には，この無名の一牧師の書物は極めて斬新な響きをもっていたはずです。

今カッコに引用したのはエドウィン＝ミュアの「小説の構造」中，ピカレスク＝ノベルを簡潔に定義した部分ですが，この定義に合致するフィールデング等の小説とスターンのそれとの肌合いの差は驚くべきものがあります。

スターンの語り口が斬新であったばかりではありません。「トリストラム＝シ

ャンディ氏の生活と意見」の敍述そのものも，当時の読者が Defoe から Smollett に到る英国小説の源流を形成する小説を読んで抱いていた小説の概念とは，余程違っていたものでした。

スターンは牧師の衣を着用し道化の面をかぶり読者にふんだんに Humour をふりまきながら，実は人間の外に現われた行動の描写のみに専念しているそれまでの英国小説の本流に決然とした反抗を試みているのです。

先程引用したトリストラム＝シャンディ氏の生活と意見の冒頭の文章に既に，主人公の出生を物語りの出発点とするピカレスク＝ノベルの定型に対するパロディが見られます。

「トリストラム＝シャンディ氏の生活と意見」の出発点は出生より更に溯って，1718年3月の第一日曜日と第一月曜日との間に自分が懐胎された時におかれています。

人間の出生には厳粛感が伴いますが，懐胎されることには多分滑稽感が伴います。読者は牧師が書いた小説と云うので幾分好奇心をおこしながら読み始めるわけでしょうが，冒頭の文で，私を拵えるとき両親は自分たちの行動にもっと気をつけてくれれば良かったのに，との主人公の言葉に先づ毒気を抜かれ，トム＝ジョーンズやロデリック＝ランダムの様な冒険談を期待していた読者は，みごと逆捩じを食わせられます。

トム＝ジョーンズに典型的に見られる様な主人公の出生から波瀾にとむ旅を経て結婚にいたる道程をきちんと時間に従って生起する事件によって描きだすことを，自分の小説からまったく，それも意識的に，締め出したところにトリストラム＝シャンディの世界は生まれたのです。根気良く外的な世界の資料を蒐集し，時間の経過に従って組織化することによっては，現実を表象することは出来ないのだとの信念を，スターンはその作品の上で具現しているのです。

「トリストラム＝シャンディ氏の生活と意見」の各所でスターンは，この作品が古来未曽有の方法で構成されていると宣伝に務めています。

第4巻32章に至って平然と，

With all my hurry and precipitation, I have but been clearing the ground to raise the building ——と云ってのけるのもその一例です。第4巻まで読んできている読者はとうにスターンが尋常な意味での話を急いでなど居ず脱線に脱線を重ねていることをいやというほど思い知らされています。ですから With all my hurry and precipitation と書かれれば，読者は「なにをしゃあしゃあと」と反応を呈するのは明らかで，もちろんスターンはそれを狙っているわけです。

「今迄は建物を建てる敷地の地均しをやっていただけだ」につづけて ——and such a building —— do I foresee it will turn out, as never was planned, and as never was executed since Adam. と大見得を切ります。或は物を書く

といってもペンが勝手に動くまでのことで，私に責任があるわけではない，と言ってみたりします。（第6巻第6章）

古来未曽有の小説であるのは確かにペンが勝手に動くからですが，これを文字通りに解釈して「トリストラム＝シャンディ」には一定の計画もプロットも存在しないと考え，E・M・フォースターの様にスターンの作品の背後に乱脈の神の存在を嗅ぎつけるのが，果してスターンの小説論理を正当に評価しての上であるのかには疑問の余地があります。

プロットが存在しないといっても，スターンの場合は，時の経過を軸としてのプロットが意識的に放棄されているということです。

いわば外在的な時を追放し，それに代るに心理的な時を持ち来ったのです。ミュアの云う魔術的な停滞がトリストラム＝シャンディの世界に存在するのは，此の客観的な時を追放した必然的な結果なのです。

時――人の髪を白くし額の皺の数を増す冷厳な，人間の外側にある時――によって乱されることの無い，従って永遠にその姿を変えることのない一つの宇宙がトリストラム＝シャンディの宇宙であり，その宇宙の中心には第三巻になって漸やく呱々の声をあげるトリストラムが座し，彼をめぐって，その父，母，叔父，トリム伍長，スロップ医師，召使のオバダイヤ，女中のスザンナ，牧師ヨリックなどが，太陽の周囲を惑星が公転する様に，それぞれの性質を示しながら廻転しています。

この惑星たちはその形状も特性もトリストラムの印象，記憶を通じて語られますが，この中心に座すものと彼等とは直接話をかわすことはありませんし，読者にはトリストラムの性格は一切知らされません。トリストラムが自分の姿を現わさないところから，この書物をむしろ「トリストラム＝シャンディの父の意見，ならびにその叔父の生涯の片影」と改題した方が適切だとの，H・D・トレイルの説が出て来るわけなのですが，この考えは「トリストラム＝シャンディ氏の生活と意見」を一つの完結した世界として眺めず，色々な挿話の混合物と見做すことから来る見解です。

この物語はトリストラム＝シャンディ氏自身の肉声で語られます。その当のトリストラムが既に懐胎されるとき母親の観念聯合のおかげで父親の animal spirit が散らされ生涯を決定する大きな損失を背負い，出産の際にはスロップ医師のおかげで，父親の論理に従うとこれも人の一生を決定する大切な鼻が潰され，更には人の成功不成功を決定づけるクリスチャンネームが誤ってつけられるのは，ただ父親ウオルター＝シャンディ氏の洗礼名や鼻に関する奇妙にして精妙な意見を紹介する必要からだけで持ち出されたのではなく，スターンの主張は，小説の世界の中心に座してその感覚と判断を通じて読者に当の世界の状況を知らすべき主人公トリストラムが，人生の首途から普通の人間とは異って生まれついて

いる，というところにあるようです。

従ってトリストラムの判断は必ずしも一般人の判断と合致するものではなく，その口から語られる彼自身を取巻く人々に就いての意見は始めから特殊な歪みを受けているわけです。先程トリストラム＝シャンディの世界からは外在的な時が追放されていると言いましたが，それでは，この世界の中央に座しているトリストラムは何を基準にして話をつづけるのでしょうか。普通の話しでは時の前後関係がその基準であるのに，それが存在しないのです。その基準，或は方法と言っても良いのですが，それは歪んだものと前提されているトリストラムの観念聯合作用なのです。そして，この観念聯合の原理をスターンはジョン＝ロックの哲学から借用しこれを巧みに Humour の効果を出す要素としているのです。ウオルター＝アレンはこれを指摘して次のように言っています。

> Sterne had good philosophical and psychological bases for his view of the mind's workings: he was writing in accord with Locke's theory that the association of ideas in the mind was an irrational process; but he was also writing as it were a gloss upon the theory, finding his examples, pointing them out, generalizing on them, making comedy out of them. (The English Novel p. 74)

トリストラムが生まれながらに背負った宿命も，もとはと言えばロック氏の観念聯合のせいであるとスターンはトリストラム自身の口から言わせます。

主人公は前述の様に1718年3月の第一日曜日と第一月曜日との間に懐胎されます。物事を秩序立てゝ行うのを主義とする父ウオルターは on the first Sunday night of every month throughout the whole year に掛時計のねじを自分の手で捲くことに決めて居り，同時に，

> ——he had... gradually brought some other little family concernments to the same period, in order... to get them all out of the way at one time, and be no more plagued and pestered with them the rest of the month. (Book I, Chapt. IV)

という習慣でありこの為に私トリストラム＝シャンディは人生の第一歩から既にハンディキャップを背負わされるに至ったと云うのです。その次第はと，トリストラムは言葉をつづけます。

> It was attended with but one misfortune, which, in a great measure, fell upon myself, and the effects of which I fear I shall carry with me to my grave; namely, that from an unhappy association of ideas, which have no connection in nature, it so fell out at length, that my poor mother could never hear the said clock wound up,

——but the thoughts of some other things unavoidably popped into her head ——and vice versâ: ——Which strange combination of ideas, the sagacions Locke, who certainly understood the nature of these things better than most men, affirms to have produced more wry actions than all other sources of prejudice whatever. (ibid.)

この母親の観念聯合は両親が duty both epually bound to it (BK. I, Chapt . I) に従事している際彼女に，ふと，Pray, my dear, have you not forgot to wind up the clock? とウオルター氏に問わせることになり，父親の animal spirit が散らされ，トリストラムの不幸が胚胎されることになるのです。小説の出発点に於て既にロックの観念聯合の説が利用されているわけですが，スターンの真価は，この説を利用して Humour を漂わすところにあるのです。主人公の懐胎を主人公自らが語ることのおかしみだけではなく，この懐胎という小さな一つの人間的事実をロックの教説の中核的論理と結びつけるという，"metaphysical conceit" がスターンの Humour の源泉なのです。

なお読者の側に Humour を感じさせる前提として，一応ロックの観念聯合の説が一般化していなければならないわけで，さもなければ観念聯合と云われても読者には何のことやら見当もつかないわけです。しかし，Addison が「スペクテーター紙」62号および110号にそれぞれ Essay on the Human Understanding からの引用をしているのをみても，ロックの説はかなり一般の人々にも普及していたと考えられ，読者には，観念聯合とトリストラムの懐胎時の一挿話との取り合わせはすぐに智的な笑いを誘うものであったと思われます。

スターンはその方法として心理のうちの時間経過，即ち観念聯合の理論を用い，巧みにこれを滑稽化しました。然し滑稽化はそれのみに留まりません。厳格極わまりない教会法学者の高説を真面目に拝聴していると，われわれはとんでもない場所に連れ去られてしまいます。

ウオルター氏は既にその持説である人間の一生を左右すべき子供の鼻が，出産の際スロップ医師の失策によって欠かされてしまった上に，今度はこれもウオルター氏の組みあげた一大論理の重大な帰結である洗礼名の選択も，折角頭をしぼった Trismagistus という名が女中のスザンナの不注意によって極めて不吉な Tristram と誤って名付けられ絶望のどん底に沈みます。何とか改名の手段はないものかとヨリック牧師に相談しますと，教会のお偉方の集合があるからそれに同席して意見を求めたらどうかということになりウオルター，トービィ，ヨリックは揃って教会法学者 Didius などの意見を求めに行きます。いよいよ洗礼名の問題が出て来ますと，理論のための理論を弄ぶ法学者と，論理より心情を尚ぶト

ービィとのやりとりにスターンは機智と Humour を縦横にふるいます。

Now, quoth Didius, rising up, and laying his right hand with his fingers spread upon his breast—had such a blunder abouta christian-name happened before the Reformation—— [It happened the day before yesterday, quoth my uncle Toby to himself] and baptism was administered in Latin ['T was all in English, said my uncle]—— many things might have coincided with it, and upon the authority of sundry decreed cases, to have pronounced the baptism null, with a power of giving the child a new name—Had a priest, for instance, which was no uncommon thing, through ignorance of the Latin tongue, baptized a child of Tom-o' Stiles, *iu nomine patriae* & *filia* & *spiritum sanctos*— the baptism was held null....

これに対して Kysarcius が異論をとなえ，にぎやかにラテン語の学識が披露されます。Kysarcius が教皇レオ十三世教令集の例をひこうとするにいたって遂にトービィは我慢出来なくなって叫びます。

——But my brother's child... has nothing to do with the Pope— 'Tis the plain child of a Protestant gentleman, christened Tristram against the wills and wishes both of his father and mother, and all who are a-kin to it.

この言葉尻をつかまえて all who are a-kin to it といっても母親はその内には入りませんぞと，Kysarcius は妙な論理を展開します。Edward 六世の治下，Cherles, duke of Suffolk の娘が，その継母を，継母の早逝した実の息子の血族にあらずとの訴訟を起し，これが教会法及び法曹会の権威により認められたことがあると云うのです。こゝ迄ですとまだトービィの素朴さと対照させて教会法学者たちの論理の為の論理に諷刺の刃を向けていることになりますが，スターンは一歩を進めて洒落のめさぬ中は承知しません。

Triptolemus が親子は同じ肉で出来ているから親族関係というわけにはいかぬと云うと Didius は反論します。

——There you push the argumeut again too far——for there is no prohibition in nature, though there is in the Levitical law, ——but that a man may beget a child upon his grandmother. ——in which case, supposing the issue a daughter, she would stand in relation both of —But who ever thought, cried kysarcius, of lying with his grandmother?——The young gentleman, replied Yorick, whom

Selden speaks of——who not only thonght of it, but justified his intention to his father by the argument drawn from the law of retaliation.——'You lay, sir, with my mother,' said the lad—— 'why may not I lie with yours?" (Book IV Chapt. XXIX)

教会法学者連中の論理は結局は予想だにしない巧妙な笑いを誘い出すものでしかありません。これも，トービィと学者との対比，学者の鹿爪らしい法律論議と，突飛なその結論との対比が Humour を産み出しています。これも先ほどの言葉を繰り返せば "metaphysical conceit" と言うことが出来ましょう。常識では結びつきそうにないものを智的な操作によって結合することから生ずる Humour が，スターンに於ける笑いと言えます。

では，極めて情的な，'sentimental' なところを特長としていると一般に考えられているスターンの作品の笑いが智的な操作より生まれているとすると，そこに矛盾が存在するようです。

スターンの「情的」と言われるところの本質は一体何かを考えて見る必要があります。

（未　完）